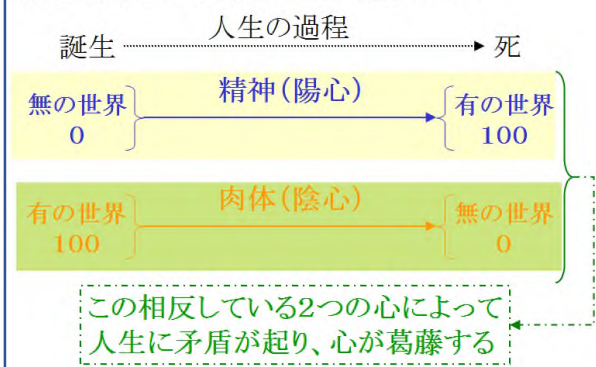


縁起（えんぎ）の理

2016年6月は、修行に入る機会を頂けた。高野山を頂点とする密教には、十八本山がある。第十四番 信貴山朝護孫子寺が私の所属本山だ。財力と勝負運を司る毘沙門天がご本尊である。こういった修行は一般公開されておらず、誰でも体験できることではない貴重な機会である。仏縁を頂けることへの感謝の念を持ちながら、入山した。この時期の修行は、自然の優しさが際立つ。新緑の中で、心地よく行に入ることができる。真冬の厳しい修行も豊かではあるが、自然の優しさに包まれながらの修行は、また違った豊かさがある。いつもの通り、1日3回の行に入る。早朝、午前、午後の3回だ。早朝の行を後夜というが、この時間帯の行が最も凜とする。下界が眠りふけている時間帯に、後夜の行が始まる。行燈やろうソクの灯りが、薄暗い真夜中の寺院を照らし出してくれる。荘厳な雰囲気だ。この時期は、梅雨の雨の匂いが、行中にひとしきり香ってくる。曼荼羅やご本尊の前で行に入るのであるが、修行は楽しい部分も多いが、それと同様に苦しい部分も多い。換言すると、行に入ると心は満たされてくるが、肉体は苦痛の連続である（まあ、それさえも乗り越えていくタイミングがあるが）。座禅の形をとると、体が鈍くきしむ。決して若くはない肉体に、顔がゆがむ。人間の肉体は衰えるという現実を突きつけられる。心は満たされ、肉体は衰える。年齢を重ねるということは、そういうことだ。以前に解説をした陰心と陽心の矛盾だ。肉体と精神の矛盾に苛まれてしまう自分がいる。

陰心と陽心には何故矛盾が起るのか？



そんな中で楽しみの一つは食事（しょくじ）だが、行中は食事（じきじ）となる。鳳閣星を主星に持つ私にとっては、楽しみというよりは苦しみになる。当たり前だが、植物性のものだけを食する。楽しみのために食べるのではなく、死なないために必要最低限の栄養素を摂取する。正に修行となる。最初の食事は苦悩になるが、3日も経過すると体の毒素が抜けて慣れてくる。すると味覚が鋭くなる。お醤油さえも、異常に辛く感じてくる。1週間もすると体中の脂肪が徐々にそぎ落とされ、頬がこけてきて、放つオーラが変化してくるのが、自分でも分かるようになる。食事をとりたいう煩悩さえ消えてくる。ただ行を全うするために、機械的に栄養素を口に入れている感覚になってくる。食べ物が美味しいとか、不味いとか云う世界を超えてしまう。食事を頂けると自体が、ただただ有り難いという気持ちになる。その領域に足を踏み入れると、だんだんと神経が研ぎ澄まされてきて、微細な変化にもすぐに気が付くようになる。匂いの変化、温度の変化、風の流れ、鳥のさえずり、新緑の息吹、人の心の動き、土地の波動、神仏に込められた想い。。。この感覚が好きだ。何者にもとらわれない、唯、在るという存在に至るのが。

そんな環境の中で修行に入ると、常に新たな発見や気付きがあるものだ。今回は東洋哲理体系の基本概念である「因果の法則」について触れてみよう。因果の法則をご存じの方も多いだろう。すべての事象には、必ずその結果を作り出す複数の原因が存在しているという概念である。その概念を昔の偉い人は「四諦」という言葉で解説をした。人生は苦に満ちている。これは仏陀の教えの根本原則である。苦とは自分の思い通り

結果（人生体験）			果
原因①	原因②	原因③	因

にならないこと。つまり人生は自分の思い通りにならないことが大前提にあるという考え方だ。これを「苦諦」と呼んだ。人生は自分の思い通りにならないことが当たり前なのだから、自分の思い通りに、人や組織や状況が動いてくれないと嘆くこと自体がズレているということだ。その苦しみ（思い通りにならないこと）の原因を「集諦」と定義した。苦しみの原因である集諦と、その原因によって生じる苦しみ（苦諦）が存在している。この因果関係は、誰も逃れることができない。そして、その原因から苦を生じさせないようにするのが「滅諦」だ。しかし、特別な修行しないと、日常生活の中に埋没しては、簡単には滅諦を適用できるようにはならないものだ。頭ではわかっている、やった方がよいとは分かっているが、実際にはやらないことが多いのは、みなさんも体験済みであろう。それを乗り越えるために、入山し特別な環境下で心を鍛えて、下界でも同じような心情で生きれるようにするのが、修行の目的の一つでもある。滅諦を適用できるようになるための具体的修行方法を示しているのが「道諦」である。道諦は八つの要素を示唆している。正しく見て、正しく考え、正直に話し、正しい行いと、正しい生活、そして正しい目標を持ち、心を正しく安定させると言う八つである。これを八正道と云う。即ち、八正道を行うことにより、いろいろな原因となることがあっても、苦が作り出されることがなくなるという教えである。仏陀が悟りを得た後、最初に説いた説法を初転法輪と云う。原始仏典の中では舍利子がこの四諦を、「全ての動物の足跡は象の足跡に収まるが如く、もろもろの善法は、この偉大なる四諦に包含されてしまう」と表現している。ほかにどんなに良い教えを頂いても、この四諦一つ聞けばそれ以上のものはありません、と言うことだ。四諦の詳細は右図参照のこと。

本題に戻そう。人生の体験は、必ずそれを作り出している原因が存在する。その原因を変化させない限り、今の体験は継続することになる。陰陽五行論ではこの因果の法則を

（宿命 + 環境）× 心の在り方 = 運命

と表現している。人生の成果・結果という運命は、それを作り出している原因である、宿命や環境、そして何より日々の心の在り方ひとつで、大きく変化していくという概念である。先天的にどんな宿命を持っているのかを知りながら生きていくことは、とても重要である。更にどんな環境（誰と付き合い、誰から学び、どんな地域に住み、どんな仕事をするのか）を選択するのも、重要である。そして最も大切なのが、日々の心の持ちよう、在り方である。一瞬はできたとしても、より良い心の在り方を継続していく意識を持ち続けるのは、とても難しい。苦諦の始まりである。思い通りにならない人生を体験することで、私たちは思い悩まされてしまう。

ここでもう一度、苦諦の本質について言及したい。人間が苦しむのは、「思い通りにならないことを、思い通りにしようとする」からである。従って、苦しみから逃れるにはどうすれば良いかというと、「思い(執着)」を捨てれば良い、ということになる。我々を苦しめる



「執着」には大きく2種類ある。1つは「自分への執着」、もう1つは「事象（モノ）への執着」だ。（ここで言うモノとは、物質的なモノだけでなく、感情などの精神的なモノも含む）たとえば、人が怒りを感じて苦しむときは、「自分」を軽んじられたとき等がある。「自分への執着」が無ければ、聞き流すことさえできる。「モノへの執着」と言えば、土地建物、アクセサリー、収入、恋愛感情、名誉名声等だろうか。人はお金のために苦しみ、時には他者を傷付けてでも、これを奪い取ろうとする狂気にかられることもある。そこで、「自分への執着」を捨てるためには、**縁起**という考え方が効果的である。縁起という言葉自体は聞いたことがあると思う。「縁起が良い」とか「縁起をかつぐ」等と使われる。縁起という言葉は、「縁(よ)って起こる」と書く。Aがあることに縁って、Bが起こる。何かがあるから他の何かが存在する、というように、全ては「**関係性**」で成り立っている、という考え方である。つまり因果の法則である。「縁起の理は、全ての物事に当てはまる宇宙の真理」でもある。「パレートの法則」、「働きアリ」の2つの例で、解説しよう。「パレートの法則」は、「会社の8割の売上は、2割の社員で作り出している」という法則と捉えてもいいだろう。では、その2割の社員だけで会社を作ると、その2割の中で更に2：8に分かれてしまう。旧来の日本企業のリストラの課題はここにあった。働きアリのコロニーも同様に、よく働くアリと、そうでもないアリは2：8に分類できる。そして同様に働くアリだけを集めて、グループを作っても、その中で2：8に収束していく。つまり、2割の上位者がいることに縁って、他の8割が起こる。逆もまた真なりで、8割の平凡な社員が居ることに縁って、2割の優秀な社員が生まれる、という「縁起の理」によって成り立っている。この「縁起の理」というバランスが崩れると、世界は成り立たない。つまり、「縁起の理」は宇宙を成立させている「真理」と云える。従って、私たちが苦しむ原因の一つ「自分への執着」は、前述した「縁起の理」を深いレベルで理解すると、捨て去ることができるようになる。「縁起の理」を換言すると、そもそも関係性のない中で生きるということは、成立しないことが分かるはずだ。目を閉じて、「自分」がどのような縁で生まれてきたのかを想像してみたい。両親がいて、先祖がいて、地球上に初めて生まれた生命体、しまいには宇宙の始まりにまで辿り着く。自分が存在する環境について考えてみると、今立っている地球、周囲の星々…と視野を広げていくと、宇宙の果てにまでたどり着く。また、視点を変えて、小さくなって自分の体の中を見ていくと、体を構成している内臓、それを作っている細胞…といった具合に、時間や空間を超えた、あらゆるものと関係があるのが分かるはずだ。自分と自分以外の関係性に注目すると、「**他者がいるからこそ、自分が存在できている**」ということがよく分かる。つまり、自分と他者を切り離して考えること自体に意味がないと気が付くわけである。ここで初めて「自分」と「自分以外」の一切に境界線がなくなり、自分に執着する意味がなくなってくる。あの苦手な人も、受け入れられない評価も、嫌いな仕事や授業も、恨みを持っていた事柄にも、私たちが構成していく上で、全て必要不可欠な存在なのである。この理屈、ご理解頂けるだろうか。この視点で今置かれている環境を見渡すと、世界観が変わってくるはずだ。嫌だ、受け入れられない、許せない、怒りに苛まれると思っていた事柄は、今のあなたにすべて必要なことなのだ。それがあから、あなたが存在できるのである。人生に起こるすべての事象は、今のあなたにとって、必要なことが起こっている。つまり感情的に受け入れられないこ

とも、あなたが本来の自分になるために、必要な要素で、不必要な体験は人生には訪れないという概念を持つことである。換言すると、人生で体験する全ての事象は、本来の自分になる為のレッスンである。全ての事象は密接な関係性があり、その関係性という縁起の理の中で、私たちは生かされているだけなのだ。

では、苦のもう一つの原因「モノへの執着」は、どのように考えれば良いのか。（ここで云うモノとは、前述したとおり、物質的なモノだけでなく、感情などの精神的なモノも含む）まず、モノを見る時に、人は「思い」と「言葉」でそれを理解しようとする。たとえば、あなたにイヤミばかりを言うイヤな上司がいたとしよう。あなたは、「憎い」という思いと言葉によって、その上司を見ることになる。一方、その上司はとても子煩悩で、自分の子供にはとても優しくしたとする。すると、その子供は父親のことを「優しい」という思いと言葉で捉えているだろう。同じ上司なのに、あなたと上司の子供では、捉え方が全く違うことになる。これは、あなたも上司の子供も、その人に対する「思い」と「言葉」に惑わされてしまい、「あるがまま」の上司の姿を捉えられていない、ということになる。ではこの上司の「あるがままの姿」とは、一体どんなものなのか。それを、密教哲理では空と捉える。つまり、それそのものには価値はなく、「ただそこにあるだけのもの」という意味である。「空」の考え方を深く理解し、モノを「あるがまま」に見ることができれば、「苦」の2つ目の原因「モノへの執着」を捨て去ることができるようになる。この空という思想は非常に難解だ。ただしこの空が理解できるようになると、実生活が一変すると、私は自己体験から断言できる。空＝諸行無常＝縁起と捉えても良い。表現が違うだけで同じ要素を示している。この様の中での全ての事象は空であり、移ろいゆくものであり、一つとして留まる事を知らずである。そんな変転変化する人生そのものに、自分の思い通りになる事を願ったり、自分でコントロールしようとしたりすることが苦悩を生むのだ。流れに身を委ねる事が最も苦悩から離れることができる。その苦悩は自分の想念、つまり思い込みで観ているだけだから、そんな自分が勝手に作り上げた幻想に対して不安や恐れを感じるよりも、全ての事象は移り変わり変転変化するのだから流れに身を委ねるという「在り方」を選択した者の元に全ての資源が集まってくるのだ。これは自己実現をするな、想いを持つなと伝えているのではなく、流れに身を委ねる、全託する在り方が、最もその者の想いを現実化する方法であると、お伝えしたいのだ。

仏教では悟りの境地に至るまでを「念(ねん)→定(じょう)→慧(え)」という3つの言葉で表している。「念」とは、同じことを何度も思い浮かべること。「定」とは、心が落ち着いた状態。「慧」とは、ものごとをあるがままに観察できている状態を意味する。つまり、「一つのことを一心に念じ続けることによって、心が落ち着き、清浄になり、ものごとをあるがままに観察することができるようになってくる」ということである。

今までの流れを簡単にまとめておく。

- ① 「苦」とは、思い通りにならないことを思い通りにしようとする事
- ② 苦しみから逃れるには「自分への執着」と「モノへの執着」を捨てる必要がある
- ③ 「縁起の理」を深く理解すれば自分への執着を捨てられる
- ④ 「真如の理(空)」を深く理解すればモノへの執着を捨てられる

物事の捉え方、考え方を変えるにはコツがある。多くの人は間違った考え方をしているために、悩みの本当の原因に気づかなかったり、自分から苦しい生き方を選んだりしている。すべての体験には、必ず意味があり、不必要な体験はしない。すべての他者、事象が存在しているからこそ、私が存在できるという因果の原則を、しっかりと理解をすることが大切である。すべての人との出会い・衝突・課題・融和・協調や、人生のすべての出来事には意味があり、体験していることを受け入れることである。そしてその体験には必ず原因があり、その原因の主要要素は自分の心の在り方である。その原因がズレていると、嫌な体験をし、その原因が正しければ、善き体験をする。つまり人生のすべての体験は自分の心の在り方へのフォードバックでもある。その体験から自分の心の在り方をシフトしていけばいいのである。今月は縁起の理（因果の法則）を基盤に、苦諦の原因である執着に関して、言及した。来月はその執着を更に深めていくことにする。

ここまでが2016年7月に記述した内容である。約4年前の文章だ。みなさんは、何を感じただろうか？今現在、世界中はコロナ騒動で大きな課題を突き付けられている。この事象をどう捉えるかは本人のセンスだ。政治経済にまで大きな課題を創り出しているのは、人間の愚かさであり、エゴであり、汚らしさの象徴が今の現実を表れている。この現実が良い悪いではなく、この現実という運命（体験・事象）を創り出している人間集合体のエゴを戒めるべきであると、私は強く考えている。この結果はエゴの象徴でしかない。非常に憤りを感じている。人は生まれ、そして必ず死ぬ。その一連の流れに逆らうから苦しみを生むのだ。流行風邪は定期的に世界中に広がってきたし、これからもある一定周期で流行風邪が世界中に広がる時期が必ず来る。人間の愚かさは、その事象を自分たちで封じ込め、何とか出来るという傲慢さの中に在る事である。自分たちは無力で、自然の脅威には無力であることを、もっと謙虚に受け入れるべきだ。私は密教修行を行うプロセスの中で、何度か死ぬ手前まで行ったが、修行本山、つまり大いなる自然を相手にすると、名誉も権力も財力も一切通用しなかった。問われたのは、唯々、胆力だけであった。つまり存在力である。大いなる自然の前にすると、人間の存在は脆く儚い存在であることを突き付けられる。そんな脆く儚い存在で在る人間は、謙虚にそしてこの瞬間をどう在るかで、その事象に対して乗り越えていけるかどうかが決まるのだ。

2020年4月5日（日）7:00Yahoo ニュース配信に絵本作家の五味太郎氏（74）の記事がアップされていた。一部抜粋をする。五味氏曰く「コロナ前の社会は安定してた？そんなことは無いでしょう。色んなことの本質が露呈されちゃってる。」新型コロナウイルスで社会も大人も「不安定」が渦巻く今、子どもたちにメッセージを届けたいと思って、五味氏にたずねたら、「そもそも、コロナ前は居心地がよかった？」と逆質問されました。400冊以上の絵本を出して世界で愛されている五味さんは、子どもを対等に見て、愛を込めて「ガキ」と呼びます。「ガキたち、これはチャンスだぞ」。子どもも大人も一緒に「不安定」との向き合い方を考える、五味氏のメッセージをお届けします。（朝日新聞、田淵紫織記者）

今日は、新型コロナで大人がずっと不安定でギスギスしたりオドオドしたりで、子どもも居心地が悪いなか、子どもたちに直接何か届けられないかと思い、うかがいました。

はい、一緒に考えましょう。それで、まず聞くけど、逆にその前は安定してた？ コロナ禍じゃなかったときは、居心地がよかった？

（記者）ぎくっ。

そうでしょ。普段から感じてる不安が、ひるがえってコロナに移っているだけじゃないかな。もっと言えば、不安とか不安定こそが生きてるってことじゃないかな。

（記者）不安？ 不安定？ それこそが人生なのですか？

心っていう漢字って、パラパラしてていいと思わない？ 先人の感性はキュートだな。心は乱れて当たり前。常に揺れ動いて変わる。不安定だからこそよく考える。逆に、「揺るぎない考え方」って死んでるってことじゃないかな。安心・安全を前提にするから、不安をマイナスに感じるし、人間を機械のように見てしまう。キャッシュレスやRPAやAIをやる人はそれを目指しているのかもしれないけど。

『じょうぶな頭とかしこい体になるために』という本を書いたことがあるけど、今みたいな時期こそ、自分で考える頭と、敏感で時折きちんとサボれる体が必要だと思う。戦後ずっと「じょうぶな体」がいいと言われてきたけど、それはつまり、働かされちゃう体。「かしこい頭」っていうのは、うまく世の中と付き合いすぎちゃう頭で、きりがいいし、いざという時に弱い。

（記者）新型コロナがはやって、お仕事に変化は？

今広がってるテレワークは、元々おれも、仕事相手のデザイナーも編集者も、毎日やること。どんどん広げていけばいいと思う。今は、ある意味、本当に考える時期。今回、うちにいたくないから職場に行くってやつが結構多いというのもわかったけど（笑）、それならその家の状況ってどうなのとか、考えるよね。働き方も国会も学校も、色んなことの本質が露呈されちゃってる。五輪の延期も、オリンピックや経済より、人の命って結構大事なんだなとやっと再確認したんだろうし、優先順位がはっきりしてくる。

（記者）毎日、刻々と変わる世界を、どう見ていますか。

感染者が何人、何%、株価がどう、とニュースで急カーブのグラフばかり見せられても正直よくわからない。金融の話ばかりで。グローバルグローバルって言っても、心でグローバルしてたんじゃないくて、お金がグローバルしてただけなんだなと、しみじみ思うよね。こうなると、世界の全体像は誰もわからない。でも、これをなかったことにはできないんだから、乗りこえていくというより、前よりよくしましょうよ。むしろおれ、ガキたちにはこれがチャンスだぞって言いたいな。心も日常生活も、乱れるがゆえのチャンス。

（記者）チャンス？

だって、仕事も学校も、ある意味でいま枠組みが崩壊しているから、ふだんの何がつまんなかったのか、本当は何がしたいのか、ニュートラルに問いやすいときじゃない。今は幸か不幸か、時間が余っているんだから。親も子も、一斉休校→再開→やっぱりやめるかも、と政府や自治体の判断に振り回されてる。一斉休校は突然で横並びで、よくなかったとは思う。やっぱり日本人って、誰かが命令してくれるのを待ってるよね。その方が楽というか、やりやすいのかな。でも、こういう時っていつも「早く元に戻ればいい」って言われがちだけど、

じゃあ戻ったその当時って本当に充実してたの？ 本当にコロナ前に戻りたい？と問うてみたい。戻すってことは、子どもに失礼な形の学校や社会に戻すってことだから。

（記者）子どもに失礼、というのは？

たとえば義務教育って言うけど、子どもにとっては教育って義務じゃなく「権利」だと憲法に書いてある。でも、6歳になったら必ず小学校に行く。他に選択肢がないんだもの。しかも、公立なら学校も先生も選べない。どんなにまずくても、〇丁目の人は全員この寿司屋しか行っちゃだめと決められているようなもの。僕の娘は2人とも途中で学校に行くのをやめたけど、学校というタイプに向いてる子と向いてない子、あるいはどっちでもいい子がいる。おれは初等教育のプログラムって、ほとんどが「大きなお世話」だと思う。人格形成とか学習能力とか…。もちろん、誰も悪意でやってるわけじゃないんだけど、全員座ってじっと先生の話聞くって、子どもの体質には合っていない。そこで栄養がとれて健康が管理できれば十分だと思うし、やりたいこと・わからないことがあったら聞ければいいと思うから。

絵本作家の五味氏の言葉をどう受け取っただろう。私は彼の言葉に、ある本質が語られていると感じた。早く今の状況が改善され、元に戻ればいいと、多くの人が感じているだろうが、元の状況に戻ったら戻ったで、不平不満、文句、愚痴が出るはずだ。愚かな人間はそれを繰り返す。100年前はウィルス感染で多くの人が死に、ワクチンでそれを抑制できるようになると癌になり、かなりの癌が完治するようになった今は、またウィルス感染で人々は苦悩する。一体どんな状況になれば、人間は愚かさを手放せるのだろうか。不安を不安に想ってしまう愚かさを抱えている事が、人間の性だと云ってしまえばそれまでだが。。

私の主治医が先日、こんなことをおっしゃっていた。その主治医曰く、私の師匠が手術中に「僕たちはこうやって癌の治療をしているけど、人間はいずれ感染症でみんな死ぬんだ」とぼそっと一言、おっしゃっていたことを今でも忘れないと。くどいが、人はいずれ死ぬ。金をいくら多く持っていて、どんなに権力や影響力を持っても、死んでしまえば使うことが出来ない。経済や国家の利権を守ることは重要だが、死んでしまえば、それそのものに意味がなくなる。私は実業家ではあるが、実業家である前に人間としての在り方が大切であると考えている。実業家は生きる手段でしかない。お金を得る事も経済を活性化させることも国家の利権を守る事も手段でしかない。手段にばかり目がいき、本来の重要な目的を見失っては意味がない。如何に在るのか、如何により良く生きるのかが、最も大切なのだ。

世界中が、こんなとき程、その者の本性が炙り出されるのではないか。世の中の風潮を観て、私は心を痛めている。人間の愚かさや醜さがこの現象を創り出している事に対して、もっと私たちは謙虚になるべきで、飾にかかっているのだと思わざるを得ない。私たちは実業家として、そして一人の人間として、どう在るかを問われているのだと思う。逆にこの現象が人間の愚かさや醜さを炙り出し飾にかけて浄化をしているとも捉えることが出来る。本性を炙り出された産業、会社組織、社会システムは飾に掛かりシュリンクするだろう。そして謙虚に流れに身を委ねる者は、変転変化を経た後に、新たな可能性に導かれていくだろう。何のために生きているのかを、再度、見直していく善き時期である。私たちは生まれたからには、必ず死が待っている。どうか後悔の無い人生を。どうか善き人生を！！